

第 31 期第 8 回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 令和 6 年 11 月 28 日（木）14 時 00 分～16 時 00 分
せんだいメディアテーク 7 階 会議室
- ◎ 出席委員の氏名 狩野富士子委員、小林直之委員、齋藤千里委員、
杉山秀子委員、高橋由臣委員、竹内透史委員、
宮崎佳子委員、矢嶋哲也委員、渡辺祥子委員、
渡邊千恵子委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 樋口千恵、市民図書館副館長 伊勢貴
広瀬図書館長 菊池雅人、宮城野図書館長 岩淵明広
榴岡図書館長 柴田雅子、若林図書館長 村上佳子
太白図書館長 湯村倫子、泉図書館長 那須野昌之
市民図書館企画運営係長 宍戸信宏
市民図書館奉仕整理係長 吾妻由美
市民図書館奉仕整理係主査 浅野佑一

◎ 会議の概要

1 開 会

2 挨拶

館長挨拶

会長挨拶

3 会議録署名委員指名

会長より渡辺祥子委員を指名

4 報告事項

（１）指定管理者制度導入館の令和 5 年度管理運営状況について

（市民図書館副館長 報告）

資料 1 に基づき報告

[委員からの質問・意見など]

議 長 総合評価はいずれも S で、非常にいい評価が出ている。各館がこれまでいろいろな取り組みを行っていることを知っているの、結果としては妥当だと思うが、評価の仕組みなどについて他の委員から疑問等はないか。

渡辺祥子委員 仙台市共通のモニタリングシートで評価をしたということだが、この評価を見て、すばらしいと思う一方、これまで悪い評価を見たことがないので、S という評価が当たり前にとれる評価なのか、結果をどう解釈すればよいかわからない。仙台市内の他施設で指定管理者となっている他企業等と比較したとき、この評価はかなり優れているという

ことなのか、どう理解すればよいか。

事務局 評価するに当たり、指定管理者が協定書や仕様書に従い業務を実施していればこの評価になるという基準がある。その基準に照らしたところ、評価の視点を満たしており、かつ特に優れている内容があったためＳ評価になっている。ＳＳ評価はさらにこれを上回る必要がある。３館とも、仙台市として要求していることを満たしたうえで、さらに加点ポイントがあると考えていただければ分かりやすいと思う。

渡辺祥子委員 基準を満たしているのは当たり前のように思う人もいると思うが、さらに加点されることがあると聞くとすばらしいと思う。

事務局 逆にこちらで示す基準を満たしていない部分があれば得点とならない。

渡辺祥子委員 Ｓという評価を得ることは大変なことであると承知した。

事務局 評価シート１枚目の二の「管理運営に係る評価」に、「Ⅰ総則」から「Ⅴ施設固有の基準」まで５つの項目がある。３館とも、ⅠからⅣは仙台市で要求している部分を全て満たしているので、要求水準としては満たしたうえで、「Ⅴ施設固有の基準」に加点があるということになる。逆に言えば、ⅠからⅤまで全てにおいて基準を下回る項目がない。そう考えていただければいいと思う。

議長 渡辺委員からの質問の意図として、この評価が仙台市内の他の施設と比較して、図書館がすばらしいということなのか、他の施設も同じような評価なのかが知りたいのだと思う。

事務局 私どもも仙台市内の他の施設の評価の全てを見ているわけではないので、その点については、はっきりと言いがたいところがあるが、仙台市の基準ではＳＳが一番高い評価である。それはかなり飛び抜けていると考えられ、ほとんど見たことがない。このことからＳというのはかなり高い評価と考えていいと思う。

渡辺祥子委員 ありがとうございます。

議長 私たちもこれまで活動の様子を伺ってきて、肌感覚として、この評価結果は実態とは決して離れていないなと思っている。

（２）「仙台市図書館振興計画 2022」の推進に向けた目標及び管理指標の状況について

（市民図書館副館長 説明）

資料２に基づき説明

[委員からの質問・意見など]

小林直之委員 管理指標の電子図書館のコンテンツ数について、どのくらい維持するかという数の基準は考えているか。

事務局 数の基準を明確に考えているわけではないが、少なくとも前年度以上とは考えている。電子図書館だけでなく市役所全ての事業についても同様だが、予算の範囲内ということとは前提となる。一方で、徐々に浸透してきたところなので、たくさんの方に利用していただくために、前年度以上にコンテンツ数を取りそろえている状況は維持したいと思う。コンテンツ数だけでなく、ログイン数、閲覧数、貸出冊数も増やしていきたい。

小林直之委員 承知した。

議長 アウトリーチ型事業や乳幼児向けイベントについては、この協議会でも重要視してきたところで、これまでの議論の内容が反映され非常に増えていると感じる。宮城県、仙台市も含めて出生数は減っているが、図書館が楽しく安心して子育てができる場を作っていくのは非常にうれしく思う。乳幼児向けイベントやアウトリーチ型事業がこのように増えているのは、意識的に計画した成果だと思う。実際に実施してみて、手応えや課題が出てきたかを各館に伺いたい。

事務局 宮城総合支所の保健センターで毎月、生後3か月から8か月のお子さんの保護者を対象に実施している「あかちゃんくらぶ」がある。参加する保護者に、図書館を利用しているか聞くと、利用者はせいぜい2、3人程度だ。子どもに読み聞かせをしたことのある方も非常に少ないという実態がある。年3回「あかちゃんくらぶ」に出向き、どちらかという保護者に向けて、実際に読み聞かせをすると、その会が終わった後に、初めて図書館を利用するという保護者が思った以上に来館される。これまでも話題になっているが、子どもにスマホやタブレットを見せて時間を過ごす若い親が多く、子どもに本の読み聞かせをしている親が少ないのが如実に分かる。ブックスタートの意味も込めて、このような機会を捉えてやってみて良かったと思っている。

事務局 宮城野図書館は宮城野区文化センターの中にあり、併設している児童館で読み聞かせをしている。また、宮城野区に初めて転入されてきた親子を対象に年2回、文化センター内の4施設合同で「ウェルカムひろば」を開催しており、宮城野図書館は大型絵本の読み聞かせや図書館のPRをしている。館内行事としては、乳幼児向けの読み聞かせ「あかちゃんほっぺ」を実施している。毎週水曜日午後に実施している「定例おはなし会」は、平日の実施では参加できないので、土日に実施してほしいという要望を受けている。アウトリーチ型事業や乳幼児向けイベントについては、いろいろなアイデアもあるのだが、職員のマンパワーに限りがあり、正直、今の体制では手が及ばない。イベントなどの事業数が増えているのは望ましいが、一体どこまで増やせるかを考えると、ボランティアの方々をお願いをしながら、やっていかざるを得ないと思っている。

議長 妊娠・出産・育児で仕事を辞めない方も増えていて、共働きが多くなっている。そうすると平日の水曜日というのは時間をつくることは難しく、やはり休日の方が時間をつくりやすい。しかし、マンパワー不足が問題だとするとボランティアの育成、参画が大事になってくるだろうと思う。

事務局 榴岡エリアは赤ちゃんや子どもたちが非常に増えてきているエリアなので、おはなし会の「おはなしぶりん」という、乳児から参加できるおはなし会を増やしている。お母さん方から、コロナ禍が明けても、他のお母さん方とどのように交流していいのかわからないという意見をたくさんいただいたので、おはなし会が終わった後の「おはなしのへや」を開放して、参加者同士が交流できるような空間づくりを意識して取り組んでいる。

榴岡図書館も水曜日の3時半からおはなし会を実施していたが、その時間帯だと参加しづらいという意見を多数いただいたので、次年度以降、開催時間帯は見直しが必要と

考えている。高校生の協力のもと、土曜日におはなし会を開催したときに、休日だったからかお父さんがお子さんと一緒に来館されたことがあった。いつもと違った参加者が見受けられたので、共働きの方が参加しやすい曜日や時間帯のおはなし会や交流会を実施できればと思う。

議 長 図書館のイベントや事業の運営を手伝ってくれる高校生の力は非常に大きいので、それを活用して、イベントに参加してくれる方やその家族を増やしたり、図書館をサポートしてくれる高校生の力を育てたりできるのではないかと感じた。

事 務 局 ご承知のように今は工事中なので、なかなか厳しい状況ではあるが、若林図書館は、
(若林図書館) 交通の便があまりよくない立地のため、子どもだけでは来館が難しい。毎月「ヤギさんおはなしかい」で新寺小路に出向いておはなし会をしており、今日も午前中に行ってきたところだが、児童館など子どものいるところに出向くことに力を入れている。児童館やのびすくなどで実施している水曜日のおはなし会は1回ごとの人数はそれほど多くないが、少しでも参加の機会を作るとの思いから実施している。アウトリーチ型事業として継続的に取り組んでいく。

議 長 共働きも多くなっているので、子どものいるところに出向くとなると、夏休みなどの長期休業に何かできないかと思う。多分、共働きのご家庭では、子どもが日中に家にいるようになる長期の休みには、子どもの時間の過ごし方に非常に頭を悩ませているのではないか。そういうところにニーズがあるのではと感じた。

事 務 局 太白図書館はアウトリーチ事業がどうしても弱くて、なかなかやり切れていないと感じている。中田サービススポットは、中田市民センターの一室を借りて開設していることもあり、中田市民センターを中心とした中田地域の大きな地域祭りである「中田まつり」には、図書館も参加させていただいている。職員は実行委員会の一員として出席し、前日の準備も手伝って、地域の中の図書館という顔を作ることができており、大変良いことだと思っている。当日は、工作の本などを並べて子どもたちに折り紙を教えたり、塗り絵をしたり、絵本を並べたりというような、小さいコーナーを持たせていただいた。本館は、太白区でいうと23万人を相手に一館でやっている大きな規模感があるが、サービススポットなどの小さな地域の中で、来てくださるお子さんや家族の方と接することも、図書館の役割としてとても良いと感じている。

議 長 地域の中の図書館というのは良い。小さな規模というのも非常に有効だったと思う。
事 務 局 アウトリーチ型事業について、泉図書館では、のびすく泉中央との複合施設のメリッ
(泉図書館) トを生かし、「おはなしの森」をはじめとする連携事業を積極的に行っている。また、地域の団体や事業者とも連携事業を行っているが、地域資源としての図書館のパフォーマンスがあれば、まだまだ可能性があると考えている。今後も図書館の素晴らしさや可能性を示して、より多くのところと連携を図り、事業展開していきたい。乳幼児向けのイベントは、「定例おはなし会」以外に、平日に参加できない方も利用しやすいように「日曜おはなし会」を開催するなど工夫を凝らして展開している。ただ、新規利用者がどれだけ増えているのかということが気がかりだ。利用回数を増やしてもらうことも大事だが、新規開拓をしていかないと、いずれ先細りになってしまうことを危惧している。

その方策を市の関係部署等と連携しながら進めていきたい。

議 長 これから春に向けて社会移動が非常に多くなるので、区役所に行くと図書館の案内があるなど、そういう試みや工夫も効果的かもしれない。それぞれの館から具体的なお話を伺ったが、私たち委員も事業の実態や課題についてイメージが十分ではないところがあるので、今回説明をいただいて良かったと思う。

杉山秀子委員 館長さん方のお話や資料から、アウトリーチ型の活動がとて大きく変わったと思った。私はどちらかというと普段の活動で子どもに関わるが多く、本はやはり家庭に帰るのが一番だと考えている。図書館の他にもおはなし会をしているところはたくさんあるし、保育園にいたときも毎月おはなし会をやっていた。先ほど話が合ったように、家で本を読まなくなっているのは事実だと思う。お母さん方が家で読み聞かせをするときも、目の前に子どもを座らせて、対面で絵本を読むおはなし会のスタイルになっている。図書館の方にぜひお願いしたいのは、実際は赤ちゃんや子どもを膝の上や両脇に座らせて、同じ方向を向いて一緒に本を読むと楽しいということを伝えてほしい。また、赤ちゃんが生まれたときに1冊の本をプレゼントすることで、その本1冊を手がかりに図書館に足を運ぶきっかけにしてもらえたらいいと常々思っている。図書館の皆さんはいろいろな活動をやっているが、子どもの施設の中では職員は、要求されることが多すぎて児童文化財（絵本・紙芝居など）を十分に活用できていない。図書館の方が子どもの施設に来て読み聞かせなどをしていただけると本の見方が違ってくると思う。

それから、私は紙芝居の団体に属しており、他県の方と話をする機会があった。その方によれば、仙台市の図書館ほど紙芝居を定例的におはなし会で取り入れているところはないそうだ。図書館側の受け入れ、ご理解を大変ありがたく思っている。生の触れ合いの良さは紙芝居だとより強く感じられるので、本当にありがたく思っている。

宮崎佳子委員 資料を見て、乳幼児向けのイベントがこんなにも充実しているのだと改めて分かった。私は小学校に勤務しているので、この会議に参加したばかりのときには、小学生と本を触れ合わせる取組みを行っていたが、小学校に入学する前の段階での本との出会いが大事だということ、また各図書館がこのように充実した取組みを行なっていることを改めて知ることができ、うれしく思う。私から保護者にお話しする機会には、図書館には様々な企画があるので活用してほしいと紹介したい。

もう一つは、アウトリーチ型事業の移動図書館「見て・知る車両展示会」についてだが、いろいろな世代の方に本を通して交流の場を作っていると思った。昨年度、秋保地区での事業に立ち会うことができたが、今年はさらに参加者数が増えたのかなと思う。移動図書館だからこそできる交流の場の工夫だと思う。

議 長 子どもでも高齢者でも、行く場所があるということはとても大事なことだ。買い物をする場に連れて行って時間を潰すのではなくて、図書館であるとか、コミュニティーの中で過ごすことができるといいと思う。

齋藤千里委員 どの図書館も乳幼児向けのおはなし会をしていることを知り、改めて各図書館の活動は素晴らしいと思った。私の娘が小学生の頃なので、もう10年、20年ほど前の話になるが、当時、宮城野図書館で小学生が読むおはなし会という企画があった。5人程度

募集していて、私の娘も応募し、読み手側として参加した。確か図書館に選書に行き、後日もう一度行って練習もしたと思う。普段、読んでもらっている側の人が、逆に読み手になる機会は珍しく、娘はとてもワクワクしていたし、楽しかったようだ。中には上手にジャグリングを披露する子もいて、とても自由な雰囲気のおはなし会だった。来ている子どもたちも喜んでいたり、そういう本との出会い方も楽しいと思う。その頃、小学校は水曜日は4時間授業だったので、どの図書館でも低学年向けのおはなし会は定番行事だった。今は、小学校の事情も変わってきているので、見直しが必要かなと思った。様々な企画があるが、普段読んでもらっている側が読み手になるとか、目先を変えた企画も楽しいと思う。また、図書館に来てもらうだけでなく、図書館が出ていくのはとても大切だと思う。地理的に図書館に行くことが難しい方たちが、自分の地区に来てもらうことで図書館のイベントに参加しやすくなるのは、本を手に入る機会の一つになると思う。

- 議 長 読み聞かせの読み手になるためには、本をたくさん読み込むだろうし、どう話したらいいかを考えるので、小学生が読み手になる読み聞かせの経験は良いと思う。
- 齋藤千里委員 娘が読み聞かせをしたときは図書館員の方が楽しく指導してくれた。まわりの大人も聞いていて楽しかった。たどたどしいが、それはまた違った味わいになった。
- 議 長 とてもいい企画だが、定着していかなかったのは理由があると思うので、また掘り起こして、再開できるようになっていけばいいと強く思う。

（３）令和６年度「仙台市図書館振興計画 2022」の推進のための取り組みについて

（市民図書館副館長 説明）

資料３に基づき説明

- 議 長 資料１ ページ目の１ １月３日に開催された石崎洋司氏の講演会に私と小林委員、佐藤幸雄委員も参加した。本当に感動的だった。開始前に実行委員の中高生に挨拶に行ったが、まだ小学生のような背丈の委員もいて、この子たちがこうして何回も集まって会議を重ね、この日にたどり着いたのだなと実感した。受付やアナウンスの運営も担当していて、確かにたどたどしい部分はあったが、きちんと進行のことを考えて原稿を作成したことがよく伝わった。小説の書き方を皆さんにお伝えするテーマだったが、たくさんの観客の中には小説家志望の子どもたち、若者たちがたくさん集まっていた。今まで私も様々な講演会に参加しているが、「はい！」と観客の手がパッと挙がって、自分の意見を述べるとか、講師の先生と会場とのかけ合いであるとか、本当に熱気を帯びたものだった。来てよかった、この場にいられて良かったと強く思った。終了後に実行委員たちに「よかったね」と声をかけると、「はい、来年も応募します。」と言っていた。本当に彼ら、彼女たちにとってはいい経験になったのだと思う。
- 小林直之委員 私も参加して、大変すばらしいと思った。私はこの委員を引き受けてから、児童文学者講演会には、おそらく８割方、９割方参加していると思うが、その中でも特別な講演会だったように思っている。石崎先生のお話は大変レベルが高く、小説の書き方を実践

的にお話しされる内容だったので、一般の方には少し難しいかなという印象だったが、参加者がそれにちゃんとついていっていた。石崎先生が出したお題にも、手が挙がる数が本当に多かったので、皆さん真剣に聴いて取り組んでいると思った。

資料3 参考資料の参加者アンケートの自由記述で、「自分のオリジナル作品を作り、先生にほめていただけたことが大きな自信になりました（10代）」とある。これが何より大事だと思う。プロ野球選手のほとんどが、子ども時代に1人のプロ野球選手に会っているという話がある。そこから始まり、憧れを持つようになり自分もプロ野球選手となっていく。この講演会も、まさにそのような機会になっているのではないかなと思う。これは読者を育てるだけでなく、将来の書き手を育てるという点でも、大変意義のある講演会だったのではないかなと思う。

議 長 小学校低学年の子が、ノートに石崎先生のお話を真剣にメモしていて、書き終わるとまた次のページをめくって一生懸命に書いている姿が印象的だった。

石崎先生が提示する文章、言葉に続く形で、小説の出だしを考えてみようというお題だったが、「これ、今考えたのかしら」と思うほど、いわゆる文学的な文章がさらさらと出てきて、本当に驚いた。作家志望の子たちがたくさん集まって熱気に溢れていて、それぞれがつながっているわけではないが、集まったらすごいパワーで、このようなコミュニティがあるのだと感心した。この協議会や子ども読書活動推進計画でも、若い世代の力がもっと活躍できるように、活用できるようにしていこうという話があったが、初めての試みでも若者の実行委員会はこの活動ができると分かった良い事例だと思う。もちろん実施するには、事務局や先生方、様々な大人の方のサポートがあったことは重々分かっているが、それ以上の効果が非常に大きかったと思う。関係者の方々は大変だと思うが、「また来年も応募します」と言っていた子どももいたので、今後もよろしくお願いします。

矢嶋哲也委員 私は当日予定があって、残念ながら行けなかったが、9月に子どもたち取材した際には、彼らの熱気にだいぶ当てられた。かなり参加者が集まり、今の話を聞く限りだととても盛況だったようで安心した。参加者アンケートの中で小学生が「中学生になるのが楽しみになりました。ぜひ実行委員をやってみたいです」という話と、娘さんを今後ぜひこのような取り組みに参加させたいという保護者の話があった。彼らを格好いいと思った小学生がいるのは、今後にとって明るいニュースだと感じている。会議をこれだけ長く重ね、子どもたちを取りまとめる職員の方々は大変だったと思うが、ぜひ今後も続けてほしいと思う。

竹内透史委員 2ページ目「Welcome to SENDAI としょかんツアー」について、外国人の方が増えており、どのようにすればよいサービスが提供できるのか宮城県図書館としても悩んでいるところで、このような取り組みには興味がある。参加した方の様子や反応、参加者が増える見込みがあるのか伺いたい。

事務局 7月のイベントは留学生ボランティアの方を対象に実施した。日本語が分かる方々で、イベントのときに通訳をする機会もあるとのことで、今後のイベントの参考になるように難しい日本語ではなく、やさしい日本語で行った。職員側もやさしい日本語

を使うのが初めてなので、どのくらいやさしくしたらいいか、失礼に当たらないのかを考え、つい主語を省いて話してしまうがそうならないように注意して原稿を作成した。名札に記載する職員の名前を呼びやすいものにする工夫もした。参加者からは、日本語も分かりやすかった、こういうサービスをしていることが分かってよかったと回答があった。それを受けて、9月は公募によるツアーを実施した。家族4人で来られた方と、中国の方1人、多文化共生センターとの関わりのある日本の方1人、全部で6名の参加だった。この回も「こういうサービスがあるのは知らなかった」「図書館のカードを新たに作って、また来てみたい」といった声や、カードをお持ちの方からは「電子図書館は使ったことがなかったが説明を受けたので使ってみよう」となど好評であった。今年度は、年明けにもう一回実施したいと考えている。図書館だけの広報だけでなく多文化共生センターにも広報していただき、必要な方に情報が届けばいいと考えている。

竹内透史委員 宮城県図書館でも外国人が来るとグーグル翻訳機でのやり取りになり、こちらからの説明を理解していただけているのかどうか分からない状況もあるが、職員は経験することで自信がつくなど、いい影響があると思うがいかがか。

事務局 そうだと思う。「お話ししたことはわかりましたか？」と確認すると、「わかりました」と返ってくるので、理解していただけたことが実感できたと思う。職員はやって良かったと話している。

全く日本語が分からないご家族の方がいたが、私たちがやさしい日本語で話していることをスマートフォンを使って自分で翻訳し、それを読みながら聞いていた。そのようなツールの使い方もあるのだと思った。今回の実施で台本ができたので、これからさらにブラッシュアップして伝わりやすく改善できたらと思っている。

高橋由臣委員 仙台市の生涯学習課で外国にルーツのある子どもが宮城県や仙台市でどのような教育を受けているかという調査をしており、社会教育委員として調査に参加させていただいた。例えば、親が先に日本に来て、生活が整ってから子どもを日本に呼び寄せるケースがある。全く日本語が分からない子どもたちがどのようにつながっているのか調査をしていたところ、やはりネットワークがあり、宮城県や仙台市の SenTIA（公益財団法人仙台観光国際協会）等が居場所となっていることがわかった。図書館は外国の子どもたちにとって日本語の習得の助けになったり、外国の書物に触れたりできるので、とても助かっているという話を聞いた。調査は子どもたちに直接インタビューする段階まできているので、生涯学習課とつながると、外国にルーツのある子どもが多く住んでいる地域など参考になる情報が得られると思う。

翻訳機を活用するのもいいが、大人も子どもも、まず心と心がつながることが一番だ。図書館を通じてそんな出会いがあれば、お互いが素敵なウィン・ウィンの関係になれるのではないと思った。

大変有名な話なのでご存じかと思うが、アメリカでは初めて訪れた街で最初にどこに行くかという、図書館に行って情報を集めるという話がある。例えば、仙台市民図書館は街の中心部にあり、仙台市の拠点になっていることが、仙台市図書館全体のネットワークの強みだと思うので、アメリカの図書館のような理想を叶えられる環境にあるの

ではないかと思った。また、「認知症カフェ」については、まさに読書バリアフリーを実現するような取組みをされていて素晴らしいと思った。

議 長 街に着いたら銀行などが私たちを迎えるのではなくて、図書館や文化的な施設が迎えてくれるのは素敵だと思う。

杉山秀子委員 8ページの福岡図書館「オリジナルブックカバーをつくろう」だが、個人的にとっても好きなイベントだ。ある人が演奏会のチラシを本のカバーにしていたことがあって、とてもおしゃれだと思ったことがあった。そういう外見から入るのも面白い取組みだと思った。しゃれたカバーを作ると、持ち歩いたらなんかいいかもと思うところから本に親しむような、一つの入口としては面白い。私が子どもの頃は、大事な本であればあるほど、表紙が汚れないように、角がこすれないようにと、必ずカバーをつけていたと思う。自分で作ったものを持ち歩くとおしゃれな気分になり、次にこの本にカバーをつけるといいかもしれないなと想像をふくらませることが、本に興味を持つきっかけになるかもしれないので、面白い取組みだと思った。

議 長 最近はお店に行ってもお店のカバーをつけなくなった。このような取組みは広がっていくチャンスかもしれない。また、ブックトレードについて、実際に活動してみて、需要は非常にあると感じるか。

事務局 需要はあると感じる。先日も河北新報、河北ウィークリーにも掲載していただいた。(福岡図書館) やはりその影響も非常に大きい、リピーターの方が非常に多い印象を受けている。前回この本を頂いたから、またこれと交換しますとか、読んだ本の感想なども話してくれる。本当に多くの方に参加していただいている。

議 長 乳幼児だけではなくて、一般の方か。

事務局 もちろん乳幼児の保護者も多く、自分の子どもが読み終えた本を持ってきたり、トレードに出ている本を見て、前に読んだことがあると言って、懐かしがって交換される方もいる。時間帯によっては小学生が児童書を持って来ることもあれば、ビジネスマンの方も昼休みに来ていただいたりしているので、本当に多くの方に利用していただいている。

議 長 ノウハウは、皆さんで共有しているか。

事務局 4月から定期的に行っているが、始めて半年なので、まだノウハウを共有するところ(福岡図書館) までには至っていない。例えば、状態の悪い本を持って来られた場合や新規利用者が増えたときにどのように対応していくのか、そういったところも検討しながら今年度は続けていこうと思っている。そういうところも含め、今後まとめてご報告したい。

5 その他

参考資料・配付資料の説明

次回協議会の案内

6 閉 会